
主人公はスライムクイーンッ！

ビビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主人公はスライムクイーンッ！

【Nコード】

N8927L

【作者名】

ビビ

【あらすじ】

スライムの女王であるエビルデインに下された命令は一つ。魔王候補の一人であるタイクーンが経営するダンジョンをぶっ潰せ。バシたら一族郎党皆殺し。スライム全てが殺される。責任ある立場のエビルデインに失敗は許されない。決死の覚悟で事に当たるエビルデインは悲壮感に塗れていた。

1. プロローグは唐突に

酒場はつねに、喧噪が絶えない。

鋭い眼光の荒くれ者たちは、顔ぶれこそ多少違えど毎日のようにここへ集まってくる。

「今日の冒険で活躍した」「魔人にあつて殺されかけた」「パーティーメンバーに告白したら振られた」「パーティーメンバーに掘られかけた」などと嘘か真かわからない、わかる必要もない話が止め処なくいきかっている。酒の肴に事欠かない。

全身至る所に傷跡を残す者、顔だけでなく脛にも傷持つ者、冒険者というより街のちんぴらに毛の生えた程度の若者がほとんどだが、カウンター席で優雅にゴブレットを傾ける少女は、ざわめきの中でひととき異彩を放っていた。

薄汚い、煙草の煙と酒の臭いの充満するこの場所にあつて、少女の周囲だけが仄かに温もりを帯びている。微笑めばどんなささくれだった人間の心すらも癒すだろうと思える優しい顔立ち、服装は至って軽装で、肌の露出はほとんどない。傍らには大きな背囊を結わえられた大きな犬が一匹のっそりと身体を延べており、少女の相棒は彼だけらしかった。

「お嬢ちゃんは旅人かい？」

耳をくすぐる心地良い低音はカウンターに鎮座する壮年の男である店主のもの。

冒険者たちに負けず劣らない眼光は鍛え抜かれた漢のみが発するものであったが、下顎を覆い隠す茂みから覗く表情は人懐っこい。

「ん、旅人とは少し違いかもしれませんが、旅をしているのは事実ですね」

「そうかい。そのワンちゃんが相棒ってわけかい？」

「頼りになる番犬ですよ。ね、ハーン」

「ウォンツ！」

ハーンは尻尾をぱたぱたと振る。少女のことは俺が守る、と言わんばかりの勇ましげな出で立ち。店主の頬を緩ませた。

カウンターに並べられた皿の一つに盛り立てられてある唐揚げを一つつまみ、ハーンの鼻先へと持っていく。より一層尻尾は激しく振るわれて、どこかに飛んでいきそうな勢いだ。口の端からは涎が垂れ落ちる。少し行儀が悪いな、と少女は思う。困ったような、しかし目に愛しさを溢れさせて、少女はゆっくりと口の端に笑みを昇らせた。

「よしっ」

許しの声とともにハーンは地面へと落とされた鳥の唐揚げを貪るようにがつついた。とてもおいしそうに頬張る姿は周囲を和ませる。

「こりゃ良い番犬だ」

「でしよう？ 自慢の犬です」

少女は自慢げだ。膨らみの乏しい胸元を突き出している。

まるで自分の娘を見ているようで微笑ましく、誇らしげに笑う少女に釣られて店主も笑う。しかし、突然に笑みは掻き消える。

「その犬がボディガードだったら早々のことはない限り大丈夫だろう。だけど、今日は早く帰ったほうがいい。お嬢ちゃんみたいに魅力的な女の子が夜道に何をされるかなんて、旅をしているのなら容易にわかるだろう？」

真剣みを帯びた言葉に嘘はなく、心から少女の身を案じているだろうことが容易にわかる。

女一人の旅だ。連れは犬が一匹。不埒な輩からすれば格好の力モとなり得るのだ。

カウンターから映る視界の中にいる下卑た男たちは、時折色に溺れた曇った眼光を少女に向けている。狙われているのだろう。

犯す。売る。他にもさまざま用途が女にはある。容姿が優れているとなれば尚更だ。

ぼんやりとした緊張感の足りない少女は理解していないのかもされない。周囲から突き刺さる色情の視線に気づかないのだから。鈍感にも程がある。

だからこそ、店主はらしくもなく、忠告をした。

「魅力的　ですか。たとえお世辞だとしても嬉しい言葉ですね。ありがとうございます」

感謝の言葉とともに少女の目が細められ、上目遣いで店主に向けられる。挑戦的な、外見に似合わない大人の視線。

何かに射抜かれたかのように店主は硬直する。現在の妻と結婚し、久しく“いたしていない”排泄物を尿に混じって垂れ流す機能だけを残したと思われるイチモツが隆起することを、久方ぶりに思い出さされた。心の臓は早鐘を鳴らすかの如く忙しく働き、自然と吐息も荒くなる。

動悸を治めるために瞑目し、しばらく　再び開かれた眼の前にいるのは、ひまわりのような明るい笑顔を浮かべる少女だけだった。何だったのだろうか、とげげんに思う。

「そうですね。もう日も変わる頃ですし、お勘定お願いできますか？」

よくわからない、そして二度と会うことはないであろう旅人に、店主はいつも通りの営業スマイルで「まいどあり、三千Gになります」と言っただけ追記しておく。

よくわからない、そして二度と会うことはないであろう少女に、店長はにっこり笑顔で「まいどあり、三千Gになります」と言った。その姿を見る、あどけない少女を見る酒場に集う暴れ者たちは、片手で数え切れない数であったことだけ追記しておく。

足下すらおぼつかないほど、闇はすっかり街を包んでいる。

先ほどまでいた酒場の耳をつんざくような騒がしさを恋しく感じるほどだ。少女は身体を縮め、小さな手で外套の襟元をしっかりと握りしめ、乱暴に傍らを通り過ぎていく強い風を遮るようかき合わせる。

辺りには誰もいない。少女を守るのは傍らによりそう忠実な獣のみ。こんな街で護身の武器すら持たないのは実に狂気の沙汰としか言いようがないだろう。

夜闇の宝石の輝きすべてを呑み込むように、真円の月が中天へ優雅に鎮座する。その銀の輝きは人の理性を弱らせるのだという。

少女は妖しい銀光を厭うように口元を引き結んだ。そんな表情すらどこか温もりを感じさせる。しかし彼女の佇まいは月に惑わされた獣たちの目には、乾ききった砂漠のオアシスのごときものであったろう。

渴きを癒すことを欲する獣たちは、故に少女を取り囲んだ。背後にも回り込み完全に逃げ道を塞ぐ。はぐれ者達のたまり場と呼ばれ

る酒場からずっと、用心深く追跡してきたのだ。ここへ来て男たちが格好の獲物を取り逃がすはずはない。

「肉欲に飢えた狼が五匹で、獲物の肉は一匹。末路はどうなると思っ？」

前に三人。後ろに二人。横道はなく、前後にも逃げ道はない。

それがわかっているのだろう。少女の目の前に回りこんだ男の一人は、現状を理解させるように必要以上に足音を立てて少女に歩み寄りながら、手には鈍い輝きを持つ肉厚のナイフを持っている。

威嚇するように少女の前に立ち、くぐもった唸り声を漏らす犬は騎士のようだ。

だが、それすら意に介さず、男は少女に近づいていく。少女を囲む男たちも同様に、下卑た笑みを顔に貼り付けている。

下種　まさに男たちは下種であった。

これから始まる暗がりの宴を思い浮かべ、下腹部を膨張させるような妄想を脳裏で繰り広げながら、男たちは現状を楽しむ。少女を狩る過程を楽しむ。そういう下賤な快感を求めている。

男たちの望む過程は、泣きながら許しを乞い、貫かれる少女の姿のように泣くのか、どのように啼くのか、それだけが問題だ。

「私、男にはうるさいんです。前もって聞かせていただきますけど、貴方たちは勇者ですか？」

だが、少女は困ったような笑みを浮かべるだけで焦燥感は全くない。こんなことはまるで脅威ではない、というように日常の風景であるかのように。

舐められている、と男は思う。

下卑た男たちは小さな誇りを守るためには殺しすら厭わない。いっそのこと全てを奪ってやろうか、と目に危険な光を宿す。

「勇者なんかじゃねえ。ただの冒険者だ。それに、お前に拒否権なんて」

「ああ、そうですか。じゃあ、ハーン。殺していいですよ」

抹殺の意志を主から伝えられた従僕は、口元を大きく歪め

『オッケー』

くぐもった声が空気を震わせる。

それまでは犬の皮を被っていた存在が、一気に化けの皮を剥がした。

一瞬の出来事。

男は自分の死すら気づくことはなかったであろう。閃光の如き俊敏さで跳躍したハーンは、抵抗する時間すら与えず、喉元を噛み干切った。失われた喉から噴き出るとす黒い何かは外気を湿らせ、恐怖を伝染させる。

尋常ではない恐怖は逃走という行動すら奪い取り、金縛りにあつたかのように身体を自由を奪う。絶対的な強者に背を向けることなど、か弱き生命には許されない。

身動きとれない男に、のそりのそりと緩やかに、しかし、力強い足取りでハーンは近づいていく。

一人は頭蓋を噛み砕かれ、一人は腹を蹴られて臓腑が潰れた。

恐怖が爆発し、生きるためだけに本能が動き出す。背を向けて走り出した男二人は仲間を見捨てて、喘ぐような声を漏らしながら走り出す。だが、片割れはあっさりと命を落とした。逃げ出そうとした瞬間に足が泣くなり、つんのめるようにこけた矢先、頭を踏み砕かれたのだから。

男の足を切り離したのは少女の腕、踏み砕いたのも少女の腕。いや、正確には腕ではあったが今は刃に変異しているものと、腕では

あつたが今は槌に変異したものだ。

この光景を見て、幸か不幸か生き延びた男は腰が砕け、地面へと尻餅をついた。

現実離れした光景だ。

それなりに経験を積んだ冒険者である男の仲間の命をあっさりと摘み取る犬に、腕が変異する化け物のような少女。

カモは少女たちではなく、自分たちであつたのだ。

「アハ、ハハハ」

壊れてしまったような人形のようにカタカタと口を動かしながら、乾いた声が溢れ出す。

止まれよ、と希つても止まることはなく、より一層と声は高まつていく。

男は初めて知つた。逃れられない死に直面したとき、人はどういふ行動を取るのか、と。

笑うのだ。笑うしかないのだ。

「ハハ、アハハハハッ！！！」

虚ろな目に気はなく、何もかもを投げ捨ててしまった男の前には困惑気味の少女と犬。

『どうする？ 見られたのだから殺すのだろうか？』

「別にどっちでもいいんですけど あー、とりあえず何か知つてることでもないか聞いておきましょうか。殺すのは後でもできますし」

『わかった。俺は従うだけだ』

「では、まあ」

座り込んでしまった、いつの間にか股間を濡らしている男の顎を蹴り上げ、少女は月明かりに照らされた、まるで天使のような温かな微笑を浮かべながら、問う。

「勇者　どこにいるか知りませんか？」

石造りの城は何の装飾もされておらず、余計は付随物が皆無であった。

砦としての機能的な美のみを追求されたそれは無骨な、同時に見るだけで他者を圧倒するような威風堂々とした佇まいである。それもそうであろう。この城こそが魔物の王が住まう、人々からは魔王城と恐れられる城なのだから。

玉座に収まるのは、青白い肌の青年だ。纏う雰囲気は気高く威圧的で、美しくも冷たく整った顔立ちと相まって見る者をすべからく圧倒する。形のよい眉が不機嫌にひそめられており、細い指先がそこを揉みほぐしている。

原因は、眼前で膝をつく、安穩とした表情を浮かべている少女と犬である。

相も変わらざるのほほんとした空気を振りまくペアを見て、彼デイバビル「ドラゴン」プリンスは苛立たしげに嘆息する。

「で、真の勇者を見つけられなかったと。そう申すか。エビルディン「スライム」クイーン」

「はい　村三つに入り込み、皆殺しにしても出てきませんでした。

仕方なく最寄の都市である　ダンジョンの商売が繁盛しているデ
コワシティに赴いて二ヶ月ほど探索してみたのですが、見つかりま
せんで　むかついたのでストレス発散に街中で何人か殺しちゃい
ました。指名手配されちゃってるかもしれない。いやあ、困りま
した。どうしましょう」

「エビルデインよ。わらわが一番嫌いなものは知っているか？」

「存じ上げておりません！」

全くの間もなく、考える素振りすら見せずに即答する少女　エ
ビルデインに対し、デイバビルは心底呆れ果てるようにタメ息を
漏らすことを誰が責められようか。

与えた任務をこなせずに、それでいて胸を張りながら自分に報告
する少女の神経をデイバビルは全く理解できない。責任感という
ものが致命的に欠けているのではないか、と彼はこっそりと危惧し
ている。

「何の成果も上げられん部下がわらわは一番嫌いだ！　次期魔王に
なるためにはどうしても勇者の首がいる！　数少ない勇者の首がな
！」

「あ、勇者の首なら　報告はしておりませんが、村勇者の首なら
八個ほどあります。ハーン、お見せして」

思いついたようにぽんと掌を叩くと、エビルデインはハーンに指
示をする。

如何にも「実は私仕事してるんですよ」と胸を張る少女の神経の
太さにデイバビルはより一層深く吐息をこぼす。

「ほう　村勇者ごときでわらわに満足せよ、と……そう申すか？」

抑えに抑えてもなお震える声音が部屋に響く。声に含まれた圧威

の魔力を受けるだけでも、普通の人間なら死んでしまうほどのものだ。だが、エビルデインはケロっとしていて、それが彼の怒りを増幅させるのは言うまでもない。

額に浮かぶ青筋はひくつき、膨張している。あと少しで破裂してもおかしくないほどのソレは、少女の言葉によって破裂の危機に晒されることとなる。

「真の勇者見つけるとか無理ですって。どこにいるか情報が全くないんですもん。そりゃね。スライムはいっぱいいますよ。私もスライムの王なんて名乗ってるからにはスライムからの情報はいっぱいあります。けどね。スライムって弱いんですよ。勇者なんかと会った日には瞬殺ですよ。むしろ、そこらの街のガキにですら負けるやつもいるんですから。つまり、真の勇者が狩りをするような場所には同族はいないわけです。弱いんですから当然ですよね」

『持ってきたぞ』

指示を受けて部屋から姿を消していたハーンは、どこからか持ってきた大きな背嚢を地面に転がし、中から首を八個取り出す。全て腐敗していた。

部屋を満たす下劣な臭いにディバビルは鼻を曲げて不快感を顕にする。それをいち早く察したハーンは首を背嚢へと戻し、玉座の間にある窓から急いで外へと放り捨てるが、「戦利品を勝手に捨てないでよっ！」とエビルデインに頭をどつかれた。

ハーンは部屋の片隅へと移動し、不貞腐れるように寝転がってしまふ。

「で、ですね。えっと……私としましてはドデカイ首ではなく、小さな首を積み立てるほうが得意です。なんならここらの勇者全員奪ってきましょうか？ 青田刈りのなッ！」

「いらんことをするなっ！ 成長するまでに刈り取ったら戦闘ジャ

ンキーばかりの勇者監督局から文句が来る。それに村を潰しすぎるな。生かさず殺さずがわらわの信条　ではなく、早く結果出さんかっ!」

勇者監督局というものは『勇者を弱い時点で殺したら楽しめない。強くなれそんな才能のある奴は放置しようっ!』そして、強くなったら楽しんでバトルしようっ!』がモットーの組織である。デイバビルからすれば理解できない考えだ。脅威になる前に殺せばいいだろう。それにはエビルデインも激しく同意する。無視なんて余裕でしょう。

無視した結果が腐った首が八個なわけだが。窓から飛び去っていった首八個。

失ったものは取り戻せない。乾いた視線を窓の外へと向けていたエビルデインは視線を戻し、デイバビルを仰ぎ見た。

「いやぁ　適材適所ってものがあると思っんですよ。ほら、私って見た目の通り可憐でしょう?　力仕事や肉体労働は苦手です」

立ち上がり、くねくねと身体をよじらせながら自分のキューティクルを見せ付ける少女はとても可愛らしいが、返ってきた言葉は冷たいものだった。

「黙っている、軟体動物」

「ひどっ!」

あくまで身体を変異させて人間の少女のように振舞っているだけで、もとはスライム。でかいスライムでしかない。ゼリー状のスライムでしかないのだ。

可憐などとは程遠い。

『あなたがち間違っていないだろう』

「飼い犬に手を噛まれたっ！」

先ほど空気を読めなかった主に怒られたハーンはぼそつと呟く。

エビルデインは孤立した。

酷く困惑して、シヨックを受けている少女の落胆ぶりをつぶさに観察し、多少は溜飲を下げたデイバビルが笑みを浮かべながらエビルデインに提案する。

「で、だ。こんな情報がある」

「私に不都合な情報ではない限り拝聴したく思いますが、不都合であった場合、私の耳は著しく能力が下方修正されます。閣下のにやついた表情から鑑みるに、きつと不都合ですよね……私をイジメて楽しいんですか？」

楽しい、とその顔が無言で物語っていた。

「くくく、良い情報だぞ。真の勇者のありかはわからんが、我が兄が最近新しくダンジョンを製作したようだな。そのデコワシテイとやらに作ったらしい。人間たちも発見して、いろいろと人材派遣されているらしい。わかるな？」

「わからないです。わかりたくないです」

「勇者を探しながらダンジョンへ潜り、我が兄のダンジョンを叩き潰せ。経営不振に陥らせる」

ダンジョンの経営利益は人間の死体である。生きているままでも利益になるが。

死体であったならば人間の死体から練成して核を作る。これが美味しいと評判で、魔界では美食部門第一位を堂々の三十五年連続制覇している。

美容にも良く、万病に効くという至れりつくせりのものなのだ。
ちなみに、生きていたら人間スキー専門の店に売り飛ばされたり
することになる。たまに魔改造されるものもいるが。

強ければ強いほど、美しければ美しいほど魔改造にも、核にも役
に立つ人間となる。だから、ダンジョンには多くの財宝が隠されて
いたりするのだ。愚かな人間を呼び寄せるために。

その人間を倒すために多くの魔物が配置される。そして、最下層
にはダンジョンの動力源があり、それを壊されるとダンジョンは立
ち行かなくなり、閉鎖される。

それを壊せば晴れて真の勇者になれるわけだが……。

「同族殺しですかっ！ 大罪ですよ、それっ！」

今、エビルデインに求められていることは一つ。要するに魔物を
殺して、最下層に辿り着き、動力源を壊して来い、とそういうこと
なのだ。間違いなく犯罪である。バレたら言い訳の余地なく一族郎
党皆殺しだ。

エビルデインの場合、世界全土で生息しているスライムも全員一
族なので、スライムという種族が立ちいかなくなる。責任重大な立
場である。そんな大罪を犯せるはずもない。

「ああ、今日は死ぬには良い天気だ。ハーン、お前もそう思うだろ
う？」

『はい。実に良い天気です。死を祝福するかのような、どんよりと
した曇り空が実に美しい』

だが、命が懸かったというのなら とうなるのだろう。

「ハーン、裏切る気ですかっ！」

『俺は強い者の味方だ』

「裏切る気だっ！」

部下には裏切られ、上司には脅される。
中間管理職の悲しさである。

「で、どうする。エビルデインよ……選択肢は二つだ。わらわの玩具になるか。バレないように上手く罪を犯すか。どちらにする？ちなみに前者を選ぶなら苦しんで、苦しみぬいて、何年もかけてじっくりねっぶり生かさず殺さず、じわじわと死へ導いてやるつもりだが……」

「我が忠誠は閣下とともに！」

「うむ、実に良い返事だ。これからもわらわに尽くせよ」「ハハアッ！」

エビルデインは思った。

ぜってーぶっ殺してやるこのクソ王子、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8927/>

主人公はスライムクweenッ！

2010年10月13日11時18分発行